

昭和三十三年五月二十一日

京極氏入部三百年記念歴史講座

丸亀の港と塩飽の船方

主催 丸亀市公民館  
講師 真木信夫

「丸亀の港と塩飽の船方」の翻刻にあたり

安藤 寿啓

原本は丸亀市立図書館に蔵されており、歴史関係の書架の隙間にひっそりと佇立するこの一冊に眼をとらしたとき、私は大切なものを発見したと気づきました。約四十年まえ、まだまだ諸事万端にわたり窮屈だった時代にまとめられたものです。わら半紙にガリ版刷りというのも当時の世相を反映しており、用紙は茶色に変色して、経る年月を感じさせます。郷土を愛し、そしてその歴史に深い関心を持つ方々にひろく読んで欲しいと思いましたが、原本は損傷や朱筆が多くて読みにくいたので、翻刻によることとしました。

故真木信夫氏が郷土の歴史家として、代表作『塩飽海賊史』の他に、郷土史研究上の貴重な道標ともいえるべき著作を数々残されたことは周知のことです。氏の経歴書に目を通しますと、丸亀中学、香川師範を卒業、小学校訓導・校長を歴任、退職後、本島村長に二期就任す」とあります。丸亀市本島町笠島の由緒ある家系の出身であり、それがあるがゆえか「塩飽船方」に寄せる哀惜の情と、その活躍の軌跡への想いが本稿の骨子となっております。前半は、丸亀港の歴史的背景とその変遷について語られています。そこには私達が日常的・断片的に承知している中讃地域の郷土史上の事柄を、史実を踏まえて丹念に、しかも系統立てた説明がなされ、あらためて新鮮な感嘆を呼び起こされます。氏の歴史考証が厳密であることは『塩飽海賊史』にまつまでもありません。本講演速記録にもその片鱗が随所に伺えます。

ここで、どうしても断っておくべき事柄があります。講演の場合には喋り言葉が一過性のものだけに、内容を聴衆に印象づける技法として、ときには用語の「繰り返し」を必要とします。これは止むを得ぬことです。ところが、これを速記録そのまま、忠実に文章に置き換えますと、用語の反復による煩雑さが目立ち、講演内容の印象が

かえって弱められてしまいます。これは耳で聞くことと、眼で読むこととの差が出てしまうからです。本講演においてもその傾向は散見されました。やむなく、講演の内容はもとより、真木氏特有のリズムを損なうことのないよう細心の配慮をしつつ、あえて、最小限の意識と、反復用語の省略を試みました。

「丸尾五左衛門」の話が出てきます。そのなかの丸亀南条町寿覚院（浄土宗）の丸尾家ゆかりの墓について、私なりに少々補足しておきたいと思えます。一方、誰の墓なのか、古くから諸説あり、真木氏も講演のなかでは、流説をそのまま紹介するにとどめています。先年、私は故あって丸尾五左衛門一族の系譜を調査していた際、寿覚院の墓地を訪れました。丸尾家ゆかりの墓には、「南無阿弥陀仏 智光恵印信女靈位、元禄十四年辛巳五月初三日、施主 塩飽丸尾五左衛門」とありました。

一方、多度津町在住の丸尾俊一氏は、初代長雲を祖とする、第十二代目の当主です。同家に伝わる二通りの過去帳によれば、何れも「元禄十四辛巳五月、智光恵印、重正内室丸亀於由」と明記されており、これで、三代重正が正妻於由を偲んで建てた墓であったことがはっきりしました。牛島には丸尾家の墓所が二ヶ所あり、初代五左衛門長雲から十代五左衛門俊次までの一族すべてがここに葬られています。丸尾家は代々熱心な真言宗徒です。寿覚院の於由の墓には、「南無阿弥陀仏」とあることから、彼女は浄土宗の信徒として、ただひとり丸亀のこの寺に寂しく葬られたのでしよう。

丸尾五左衛門一族にまつわる話には史実以外にも、いろいろな魅力を持つ物語が数多く残されています。寿覚院墓碑の流説もそのひとつと言えましょう。〔平成八年七月記す〕

# 丸亀の港と塩飽の船方

『京極氏入部三百年記念歴史講座(三)』—速記録より

○昭和三十三年五月二十一日、於丸亀市公民館 ○主 催 丸亀市公民館 ○講 師 真木信夫

お見知りの方もございますが、私、本島の真木と申します。今度、丸亀の歴史についてこの講座が開かれることになりました。他の先生方が陸の丸亀というのをやるから、君だけ一つ、海の丸亀の話をしたらどうかというようなお話でございましたので、『丸亀の港と塩飽の船方』と題しまして、丸亀市の港湾の発達をたどってみたい、かように思います。

## (一) 古代の瀬戸内海と港—丸亀港

丸亀の港につきまして、その前身である「中之水門」(御宮津)のことを、これから申し述べたいと思うのでございませうが、昔はそれぞれの郡に港があって、その郡の名前をつけておりました。

中之水門は那珂郡の港で「那珂の港」中之水門であります。港のことを「津」と言いますので「中津」と申します。多度郡の港は多度津であります。

三豊郡は三野郡と豊田郡が一緒になったもので、三野郡の港は三野津、いまの吉津付近だろうといわれております。豊田郡の港は豊田津、いまの豊浜であろうと申されております。

綾歌郡は鶴足郡と綾郡が一緒になったもので、鶴足郡の港は宇多津、綾郡の港は綾の津、いまの松山の津のこ

とであります。

この那珂郡と多度郡、つまり現在の仲多度郡は金倉川と土器川の流域でありまして、讃岐としましては最も早く文化の発達した地域であります。

その周囲を取り巻いておる聖通寺山、飯の山、高篠、岡田、象郷、それから大麻山、我拝師山、弥谷、白方、こういうところで沢山の土器や石器が発掘され、古墳もあちこちで発見されております。

またここには郡の司庁—郡家があったこと、そして「条里の制」が発達しておったこと、また軍団が置かれていたことなどから考えまして、この那珂郡は非常に早くから開けていたことがわかります。

その交通路といたしましては官道である南海道の駅路

がいまの国分、その時代の河内駅、それから郡家を経て豊井駅—現在の筆岡の永井あたりへ通じて、その先は柞田(杵田)の駅へと続いておりました。

このような陸の交通網とともに海の交通も開け、那珂郡の海の出入口が、中之水門—中津であったのであります。

その時代の陸と海の交通を比べてみますと、陸は非常に不便でありました。ことに、沢山の荷物などを運搬するとうちは、どうしても海のほうが便利であります。そこで船さえあればなるべく陸を避けて、極力、海の交通によるうとしたものであります。

そのような事情から、朝廷では古くから海の交通によることを命じて参っておりまして、崇神天皇の十七(802?)年の七月には海部、つまり海浜の民が船がなくて物を運ぶのに非常に困っているからということで諸国に命じて、船を建造せしめたということがいわれております。

それから、その後も荷物の運搬、あるいは国司が赴任する場合には、必ず海路を船によって往行するように、との指令が出されておりました。

このように、古くからこの海路は大変発達いたしました。特に三韓との交易、あるいは遣唐使の行き来や、ことに大化の改新後に中央集権が確立いたしましたからは中央と地方との交流が盛んになり、この瀬戸内海の交通というものはいよいよ輻輳して参ります。

瀬戸内海の交通が頻繁になりますと、各地に港を構築

する必要に迫られて古くは都に近いところに難波の津、あるいは武庫の津が出来ました。後にいわゆる「五泊」—五つの港のことですが、一日の航程をきめて、大坂から一日行ったらどこの港へ着きそこで泊る。その次の日はどこそこの港まで行けるから、そこで泊るといふことで、大坂の近くの川尻というところから室津(むろ)まで五つの港をこしらえました。

行基菩薩がこれを作ったと申しておりますが、この五泊が本当に出来たのは桓武天皇の初め、つまり平安時代の初期(818年頃)であろうということが定説となっております。

この、川尻というのは現在の神崎川の川尻をいうようであります。この川尻から次に大輪田の泊、今の兵庫であります。それから次に魚住(ういず)の泊、韓(ま)の泊、室(むろ)の泊と、こういう五つの港を五泊と申しております。

このように港はだんだん整って参りましたがこの時代の船はごく小さかったので、航路は沿岸か、近海に限られておりました。その当時、四国の沿岸は、中国地方に比べるとやや遅れておりました。

この四国の沿岸の航路におきまして、那珂の港は重要な地位を占めて参ったのであります。その当時の中之水門が、どの辺にあったかということにつきましては、現在とは海岸線の様子が変わっておりますので、いまの中津とは、必ずしも一致しておりません。むしろ東に寄っていたのではなからうかと思われま

現在の地名で、今津、あるいは津森、高津、こういうふうには、『津』という名称がついているところは、その当時の海岸線であったのだらうと思います。

この中之水門に立ち寄った有名な人々につきまして、その主なものを挙げてみますと、万葉歌人の柿本人麻呂がこの中之水門から船出をしております。そのときの、人麻呂が残した長歌のことはあまりにも有名なことですが、あらためてここにその一部を再掲します。

(万葉集 第二巻二百二十)

たまも よし	さぬきのくには	くにがら か	みれども おかぬ
玉藻吉	讃岐国者	国柄加	雖見不飽
かむがら か	こした たよき	あめつち	ひつぎと ともじ
神柄加	幾許貴寸	天地	日月与共
たり ゆかむ	かみの みおもと	つぎてくる	なかの みなとゆ
満将行	神乃御面跡	次来	中乃水門從
ふねうけて	わがこき くれは	ときつかせ	くもい に よそに
船浮而	吾榜来者	時風	雲居尔吹尔
おきみれば	とい なるた		
奥見者	跡位浪立		

ついで、法然上人が讃岐へ流されまして、塩飽本島を出て琴平の東のほうの小松庄に行かれる時、いまの塩屋の沿岸に舟を着けられたが、その当時水がなくて人々が非常に困っていたので、上人が權で海岸を掘ると、そこから真水が湧き出たので權掘りの井戸というようになった、という話が伝えられております。このとき法然上人

まの東汐入で、ここがまず開けました。東汐入は東川口といておりますが、その後西川口、西汐入のほうが港として利用されるようになったようでありませぬ。その当時においては、まだ福島という地名はありませんでしたが、現在福島町となっておりますあたりの沿岸この付近が、舟入”という名前で古い地図にのっておるところをみますと、やはりあの沿岸も一つの港であったものでありませぬ。

しかし、生駒一正がこちらへこられた当時においてはまだ港というのは十分できておりませぬし、水夫も少なかったもので、宇多津だとか、三浦—北平山、西平山、御供所(ごご)の浦人を招いて水夫にしたと、こういうふうにいわれております。

しかも、港はまだ不完全で、文化三(1869)年に福島の湛甫(たんぷ)をこしらえ、次に、天保二(1831)年に新堀の湛甫を作りまして、やや、港らしく整って参りました。その後丸亀が城下町として栄えるにつれて、港のほうもだんだん発達いたしました。諸国の物産がここに集まって売買されるようになりました。特に米、綿、干鰯、うちわ、いかき、こういうようなものが多くあきなわれ

ておるようであります。これらにつきましては、後にまた福家先生から多分お話があることだらうと思いますが、その中で綿などが多く生産されていたようで、これにつきましては津坂木長の書いた『丸亀繁昌記』に、『国々へ積出す雪綿は、大与(今の黒瀬)で当時は大坂

が上陸した塩屋が、中之水門だったのであります。いささか余談にわたりますが、戦国時代に入りまして、毛利の小早川、吉川の軍が、雨霧山に陣を敷いておりました香川信景を攻めて来ました。

このとき、香川信景の家臣平尾河内守元家が、軍兵三百余人を率いて信景の先陣を承わって毛利の軍と華々しく戦って討死しております。そこには塚が残っておりまして、これが平尾河内守元家の武勇を偲んで建てられた「平尾塚」であると、こういわれております。

そのとき毛利の大軍が上陸したのがやはり、中津や、多度津の堀江だらうといわれております。

また、すでに、堀田先生からお話があったこととは思いますが、万治元(1620)年、京極高和侯が播州竜野から丸亀へ封ぜられるのに先立ち、高和侯の家老佐々九郎兵衛、佐脇作右衛門等が万治元年三月二十三日に丸亀城を受取りに来ております。その時家老達を上陸したのが今の塩屋だといわれております。

こういうことを考えますと当時の中之水門、今の塩屋付近であります。これが丸亀の港として使われておりますが、それが現在の丸亀港の位置になりましたのはそれから後のことでもあります。

おそらく慶長二(1595)年に生駒一正が丸亀城を築城してから後、現在の丸亀がいわゆる城下町として発達するようになりましてからで、中之水門が東へ移って、現在の丸亀港のもとを開くようになったものでありませぬ。これに先立ち、丸亀の港の役目を果しておったのがい

屋)がかどさきに山をなし、夕陽に照らされては、ひら(比良)の高根を争う景色……………」

というふうにならぬ書き方をしておりますが、これから考えても綿が産出されておったということがわかります。また明治四(1871)年のものでありますが、今の玉積さんの玉垣を見ましても、干鰯の問屋の者が玉垣の寄進をしております。

このように諸国の物産が丸亀で集散するようになったり、また諸侯の参勤交代に当たっては丸亀港から船出すようになりました。山北八幡さんに船揃いの絵馬が残っておるのを見ましても、土佐の山内侯、つまり、高知の殿さんも参勤交代の時に丸亀から船出をしておりますから、丸亀港がその頃すでに発達しておったのであります。

けれども丸亀港の最も発達したのは何と申しても金毘羅船の賑わいでありませぬ。ここが金毘羅参りをするとき、金毘羅船の出入りする唯一の港でありましたから、諸国の船舶が丸亀に集まってきた非常に賑わいを極めるといふようなことになりました。これにつきましては、あの有名な十返舎一九の、

「膝栗毛」や「金草鞋」に丸亀港の様子が書かれています。その他にも、当時の丸亀の港や商家・旅籠などが、いかに殷賑を極めていたかについて、書き残されたものは

いろいろとあります。

なかでも、当時の様子を手短かに書いておるものとして、『金毘羅参詣名所図絵』があります。それによりますと、

『当津は畿内篠(ささぎ)より南海道往返(きんぎょ)の喉口(のど)なるべく、象頭山の参詣、大師霊場の遍路(へんろ)其餘(あま)の乗船の徒は言うも更なり。陸路と下向の輩(たぐひ)も或は田の口下(くさ)村より渡り又は下津井より越(こ)るとう何れも此方(こ)へ着岸せずということなし。されば東雲(あま)の頃より追々浪花よりの入船、向(むか)い路(みち)より着船、引きもきらずに、また黄昏(たふし)時よりは向い路への渡海(わたる)登船(のぼる)の出帆有りて船宿は賑い昼夜を分たず。浜辺の倉々には俵物(たわもの)の水揚(みづあ)産物積送の浜出し仲士の掛声、船子の呼声驚すしく、湊口には縦横に石の波戸ありて、紫銅(むら)の大灯笼夜陰を照らし、監船所(けんせんじょ)の厳重、浜の石燈籠、魚市の群集、御城は正面の山岳(やま)に魏々(ゑいゑい)としてめざましく、内町には市野(いちの)軒をならべ交易にいとまなく、就中、箆の細工物、洪団扇、圓座など名物並べてひさぐ家も多く、旅客かならずもとめて家土産(みやげ)とするなど、街(まち)の繁栄は当国第一の湊(みなと)というべし……』

とありまして、その当時の様子がしのばれるのであります。しかし、一方では丸亀港の一番の欠陥は遠浅であった

## (二) 塩飽の船方

この海運の従事者といたしましては、いわゆる塩飽の船方があります。

大体、塩飽、これは非常に面積が狭い。耕地が少ない関係上、土地には生産物が少ないのでありまして、従って島民は土地によって生活を営むことができませんで、どうしても外に出ていかなければならないというふうな運命づけられております。これは今日も昔も少しも変わっていないのであります。

ところが丁度この塩飽の島の場所が瀬戸内海の中央、備讃瀬戸に横たわっており、内海を交通するところの船は必ずこの付近を通らなければなりません。

航海中の船が飲料水とか食糧というようなものが欠乏したときには、この塩飽の島に立ち寄っていかなくてはならないというよう有様になっております。

一方、この付近が潮流の非常に複雑なところでありまして、瀬戸内海では、東は鳴門海峡、明石海峡から入ってくる潮と、西は豊予海峡から入ってくる潮等が、満潮の時分には、丁度塩飽の西のところまで出くわします。

そして干潮になるとそれが分かれていく。

丁度、塩飽の島が東西の潮の相合するところに当たっておりまして、その上、海底に深いところもあれば浅いところもある。

また、大小無数の島々が散らばっておりますから、到

ということでありまして。

十返舎一九の『続膝栗毛』にも、

『折悪し、干き汐にあって、二丁ばかり沖の方に船を止めて満ち汐を待つ。この港は遠浅にて、いつもかかる難波あり……』

というふうな、干潮時の不便さが書かれております。

このように、遠浅で船を着けるのに不便だったことから、明治維新になりまして港の改修に着手いたしました。

明治十年頃、上原新一及び十八人のひとが寄って、「せいこう社」という結社をこしらえまして、港の改修計画を立てましたが、これは十分な効果をおさめることができなかつたのであります。明治三十四(1901)年には、豊田元良市長がこの港の改修を請願してあります。

そして明治四十一年、四十三年、その後大正、昭和と次々に港の浚渫を、あるいは海面の埋立てをし、また護岸工事を起すというふうにして、今日の完備した丸亀港が出来上ることになり、昭和五年に初めて指定港湾に編入せられております。

昭和二十五年の統計によりますと、丸亀港へ出入りした船の数、あるいは屯数などは、全国重要指定港湾五百七十の中で第二十五位に入っているようであります。

そして今日では、ご承知の通り阪神、あるいは下津井、広島、松山等の間に定期航路が開かれるというふうな、まことに充実して参りました。

以上、海運の施設としての丸亀港の発展の経過をごく簡単に申しあげた次第でございます。

るところで渦を巻いております。また急流が走っておりますというふうな、その潮流が非常に複雑で潮が湧き上がっておりますから、潮湧くがしわくに変わったんだと、こう申されておりますが、このように、潮流が非常に複雑でありますから、島民には自然に海事思想が発達し、また船を扱う操舟術にも非常に熟練するようになって参ります。そこで、太古の時分から、島民は海に出て活動しなければならぬので、そこにいわゆる塩飽の海賊というものが発達いたしました。その海賊が変化発達して水軍、つまり海軍となり、船方すなわち水夫となって参ったのであります。

海賊の発生、これらにつきましてお話することは一寸長くなりますから略させていただきますが、しかし海賊にいたしましたしても海軍にいたしましたも、それからいわゆる船乗り——船頭にいたしましたも、船を實際に操縦する乗組員ということについては——船頭に対する舟子(ふねこ)、船長に対する水夫、海賊であろうが海軍であろうが、あるいは商船であろうが、少しも変わりがないのであります。

そこに昔からいわれておる海賊と海軍と貿易は三位一体——三つのものが共に並行して発達するんだと申しておるんですが、このようにして塩飽の海賊として起ったものがだんだん変化し、発達して塩飽の水軍とな

り、塩飽の船方となったものでありますが、今日は主として江戸時代の塩飽の船方、このことについて申し上げたいと思うのであります。

江戸時代の塩飽の船方を申す前に塩飽の人名(なまご)のこのことについて申さなければならぬと思えます。

人名というのは、いわゆる大名、小名に対する名称であります。塩飽は古くから海軍として非常に発達して参りましたので、まず、豊臣秀吉が朝鮮を征伐する時に当りまして塩飽の船方、いわゆる船頭を大いに利用いたしました、その時に塩飽からは船が三十二艘と水夫が六百五十人出て行ったと申しております。

大体、秀吉が朝鮮を征伐するにつきましては、早くから準備を整えておりました。全国の諸大名にその準備をさせ、十万石について船が二艘、家百軒について水夫を十人出すことを命じたのであります。

そこで国々の諸大名は、自分の石高に依じて十万石で二艘だから二十万石では四艘、三十万石では六艘というふうに船を作り、家百軒について水夫十人を出したのであります。

ですから、考えてみますと当時讃岐の国はどれだけの石数があったかと申しますと、秀吉の時分には、はっきりしたことはわかりませんが、後の江戸時代になりまして高松が十二万石で丸亀が六万石、多度津の殿さんが一万石、合わせて十九万石であります。十万石で船二艘でありますから、十九万石——二十万石として船四艘、つまり讃岐全体から船四艘出せば全国平均というわけであ

十人は千二百五十石を領して、事があれば御用船方として船、水夫を出すことになっていたのであります。

六百五十人で千二百五十石ですからひとり平均は二石に足らないほど僅かだけれども、土地を領有しておるので、この点からいえば大名、小名と同じであります。

武士は三千石、五千石といっても、ただ米を三千石、五千石頂戴しているだけで土地は少しも持っていないのであります。

ところが、塩飽は僅かではありませんけれども千二百五十石の土地を領有しているから、大名、小名も同じなのであります。それで、人名という名前が生まれた。そしていろいろな御用を勤めたのでございますが、そのうち江戸時代以前のことは一切略させていただきます。

江戸時代について申しますと、徳川家康の時代になって、島民が心配していた豊臣秀吉の天正十八年の朱印状に對しましては同じくこれを下さるることになりました。

大体領地の朱印状というのは將軍が代替りすることに下さるのであります。豊臣から徳川へ替わった時は、慶長五(1600)年の九月二十八日に徳川家康から改めて千二百五十石を六百五十人に領地せしめるといふ朱印状を貰ったのであります。

この朱印状を貰ったことで、こんな話があります。丁度、関ヶ原の戦があった時、塩飽の六百五十人の中で一ばん頭——これを年寄と申しまして四人おります。この四人が六百五十人の代表者となって全体の統治に当

りますが、それに対してこの狭い塩飽から三十二艘、讃岐全体の八倍に余る三十二艘と水夫は六百五十人を出すことを命じて来たのであり、これによりまして、その当時塩飽にいかにも優秀な船や秀れた水夫が多かったかというところを知ることができるのであります。

塩飽の土地は石高にして千二百五十石であります。これを水夫六百五十人に領知せしむるといふ朱印状を、豊臣秀吉から下さったのであります。

この朱印状は現在、塩飽に残っておりませんが、天正十八(1610)年の二月晦日、塩飽検地のこととなっております。

#### 塩飽検地之事

一、二百二十石 田方屋敷方  
一、千三十石 山島方

合 千二百五十石

右領地当島中船方六百五十人に被下候條令配分  
全可領知者也

天正十八年二月晦日

塩飽島中

以上のように六百五十人に領知せしめるという朱印状を貰った代わりに、塩飽の六百五十人は秀吉の船方として、一朝ことがあれば船を出し、水夫を出す。丁度武士が、何千石かの石高を貰っている代わりに、一朝ことが起きれば、君の馬前に馳せ参ずるよう塩飽船方六百五

たっておりますが、その四人の中の宮本伝太夫、入江四郎右衛門の二人が大坂へ参っております。

後は吉田彦衛門、私の先祖である真木又左衛門というのが留守をしておったようでありますが、この大坂へ行った宮本伝太夫は関ヶ原の戦で徳川が勝ったということを知りまして、近江の長浜へ参りまして家康侯が意気揚々として大坂へ入城しようとしている時、長浜でお迎えして本陣へ行き、関ヶ原に勝ったお祝いを申し上げたので家康は非常に喜んで、宮本伝太夫は身分の非常に低い者であるにもかかわらず、諸大名が誰もお喜びにやっこないうちに真先にやってきたのは殊勝の至りであるとほめられた。

そして朱印状は大坂へ入城してから追って沙汰するということでありましたので、宮本伝太夫は非常に喜んで家康の入城まで待つておったのであります。

その後、家康は慶長五年九月二十五日に大坂へ入城したので二十八日に入江四郎右衛門と共に参上、西の丸で小笠原越中守の取次ぎで、改めて家康からこの朱印状を頂戴いたしました。

関ヶ原が慶長五年九月十五日、朱印状を貰ったのが二十八日、僅か十三日ただけなんです。

あの天下分け目の戦争の後でありますから十日や二十日の間は家康としては非常に忙しい時でもあり、塩飽のごとき小さい島の朱印状については考えられないような忙しい最中に、この塩飽の土地の朱印状を下さったというところについては、いかにこの塩飽の地を重く見ていた

か、またその当時の年寄の宮本伝太夫がいかに秀れておったかということを知ることができるのであります。

こうして、引き続き徳川幕府の御用船方となったのであります。そして何かことがあれば船及び水夫を出すように、との命を受けております。

慶長十一(1606)年に江戸城を修築いたしました。その時分に塩飽から船二十艘を出しまして、瓦、材木等を積んで堺から江戸へ送るということをやりました。

それから次いで西の丸を修築した時分には、十三艘の船を出して材木を送っているようであります。

その後、元和元(1625)年の大坂夏の陣の時分にも兵糧米を備中から堺へ送るのを塩飽の船が引き受けており、また三代将軍家光の寛永十四(1637)年、九州天草島原の乱の時にも塩飽から船を出しております。

天草島原の乱では、初め板倉重昌が大将となっていました。板倉重昌が失敗いたしました。その代りに松平信綱が大将となって参りましたがその信綱の行った時にも、全体で船三十艘、水夫三百三十七人が出て糧食等を運搬しているのであります。

それからいろいろな殿様のお国替えなどがあります。幕府が武家諸法度を作りまして、なるべく、諸大名の勢力を抑えようとして、何か事があればそれを国替えするとか、あるいは取りつぶしてしまうというようなことをやっております。

ところが、板倉重昌が失敗いたしました。その代りに松平信綱が大将となって参りましたがその信綱の行った時にも、全体で船三十艘、水夫三百三十七人が出て糧食等を運搬しているのであります。

それからいろいろな殿様のお国替えなどがあります。幕府が武家諸法度を作りまして、なるべく、諸大名の勢力を抑えようとして、何か事があればそれを国替えするとか、あるいは取りつぶしてしまうというようなことをやっております。

船が沢山出ていって御用を勤めたのであります。このような臨時の御用を勤める外に、寛永十九(1642)年から延宝の六(1678)年、この間丁度三十六年の期間があります。この間は、幕府の巡見使や目付役が諸国を廻って、国々の政治がどのように行われているかということを調べ監督するために出向しますがその一行が大坂から豊後へ行くまで、塩飽の水夫が毎年約二百人も出て豊後へ送ることを勤めております。

その外、承応二(1653)年から宝永元(1704)年までの五十一年間と、享保五(1720)年から明和六(1769)年までの四十九年間、この百年にわたりいつも長崎の奉行が大坂から長崎まで行く場合、この時の荷物を毎年々々、あるいは時によりますと年に二度も行っておりますが、塩飽から大体平均して百八十人くらいの水夫がその輸送の役を勤めております。

この米を江戸へ輸送するのはどういう方法をとったかと申しますと、まず米どころの奥羽地方の米を福島にある幕府の米倉に集めます。

これを江戸へ送るわけですが、この時代には海事思想が非常に幼稚で、海を渡るといふことを大変恐れてお

やっております。

その中で九州の肥後の熊本に加藤忠広―清正の子であります。別にこの人は悪いことがあったのではありません。けれども、とにかく勢いが非常に強かったので、これを抑えようとして熊本を没収して、出羽国庄内へお国替えしました。

その熊本から庄内へ国替えになる時、その荷物の運搬をするため塩飽の船七十艘が出ております。

この加藤忠広の後には細川忠利、これが熊本の殿さんになったのであります。

寛永十七(1640)年に讃岐の高松の殿さん生駒高俊は、子供の時分からちよつと足らなんだ人だったので、その家来の者が我がままなことをやっておった。それがために將軍家の忌諱に触れて、これも出羽の矢島へお国替えになりました。

その高松の生駒高俊が出羽の矢島へお国替えの時分にも、塩飽から三百人の水夫が御用舟子として出ていって荷物を運んでおります。

それから越後の高田の殿様の松平侯が没落した時に、延宝九(1692)年でありましたが、その所領米を没収して江戸へ輸送いたしました。その四万五千石の米は塩飽の船七十五艘に積んで、新潟の直江津から船出し江戸へ運んだのであります。その時の運賃は七千九百八十七兩二分であつたといわれています。このように諸大名のお国替えとか、あるいは配流―流されることですが、こういう場合、その荷物を運搬するときには、いつも塩飽の

を勤めております。宝永元年から享保五年の間およそ十五年ありますが、その間は一寸休んで御用を勤めなかつたからということ、舟子の御役目金として、四貫六百匁ずつのおかねを幕府に納めております。

これは、幕府の用向きで働く代わりにかねを納めるといふ定めで、役目金を毎年納めたものであります。それから朝鮮の使いが將軍の代替りの度にお慶びに参っておりますが、朝鮮の使いが日本へやってきたときには、大坂から淀川までの往復の川舟の仕事は塩飽の者がやるということになっておりました。

このように臨時に、あるいは毎年々々定期的に塩飽の者は御用船方として働いたのであります。

### (三) 奥羽航路の開通

たのであります。米を陸路で運ぶということは、今のよううに汽車も車もない時代でありますから、到底できない相談であります。そこで、なるべく危険な海を避けまして、陸と海の両方を通して運んだものであります。

奥州の米は福島から阿武隈川を下って、荒浜というところへ行き、荒浜から太平洋を船で犬吠崎へ出て、銚子港から利根川を遡って関宿、ここから江戸川を通じて、行徳へ来て、それから江戸に着くという道程で、海路は荒浜から銚子まで、後は川によって運ぶ、こういうふう

な道順をとっておりました。

それから、出羽の方の道順を申しますと、これは秋田県、山形県あたりの今でもお米が沢山とれる地域であります。酒田で積んだ米を江戸へ送るんだから津軽海峡を通ればいいんであります。津軽海峡は御承知のように波風が非常に荒く、今でも洞爺丸の海難事件のようなことが起るほどであります。津軽海峡はなるべく避けたものであります。

津軽を通らぬとすれば日本海を通らねばなりません。酒田から日本海を航海し能登半島にたどり着き、敦賀まで来てそこで米を陸へ上げる。さらに七里の山道を越え近江の琵琶湖の岸へ出て、舟で琵琶湖を大津まで運ぶ。大津から鈴鹿山脈を越えて桑名、そして伊勢海、遠州灘を通過して江戸へ運ぶというふうになり、なるべく海を避けています。ところが、海や川や陸を長い間かかって積み替へながら運ぶものだから、途中で米が傷んで使えなくなる。また、米を運ぶ時の運賃は入札をして、安く落した者が無理をして積むものだから、船頭は勘定が合うようにする。少し波風が荒いと船の安全を願って積荷を遠慮なく海中に捨ててしまう。荷を軽くしようとして捨ててしまふんです。あるいは途中で米や商品などを売んであります。抜荷といって、荷主の荷物を勝手に売ってしまふんです。

だから、出羽で積んだ米が江戸へ着くときには、途中で海水に漬かって腐ったりあるいは無くなったりで非常に少なくなり、安く積んだ筈の米が江戸へ来ればとても高

なるコースにはなるが、房総半島をずっと過ぎて伊豆半島近くまで行き、それから江戸湾に入って江戸へ着く。百五十里という道程を船によって安全に、しかもその途中で殆どすたり物もなく送り届けることができたのであります。

幕府ではこの成功によりまして、つぎに出羽国の米を江戸へ輸送するよう瑞賢に命じたのであります。

河村瑞賢は、日本海の沿岸は太平洋の沿岸に比べて非常に難かしい、危険だということで、一そう周到な計画を立て、熟練した船員が必要だということで全国から最も秀れた船頭を物色しました。その時にまず第一番に選ばれたのが塩飽の船方でありました。

それから直島、備前の日比浦、大坂の伝法、河辺、摂津脇浜、この六ヶ所から船頭を募りまして出羽の米を運んだのであります。

寛文十二(1727)年に酒田で米を積みまして、日本海をずっと西へ回りまして、朝鮮海峡を通過して下関海峡を抜け、瀬戸内海を通過して大坂へ着き、大坂から紀伊水道、熊野灘を回って鳥羽へ着く。鳥羽から遠州灘を通過して、本州を西へ三分の二、九百里の道をこれも安全にやりとげました。その上一升一合のすたりの米もなく運ぶことができたのであります。この後、どんどん沢山の米が安く江戸へ送られるようになりました。そして灰塵に帰した江戸の街も復興の緒についたのであります。

このことを幕府は非常に喜び、瑞賢に三千金を与えてこれを賞したということでありました。

くなって困っておったんです。

ところが四代将軍家綱の時に、俗に「振袖火事」といわれた明暦三(1657)年の大火がおこって江戸中が丸焼けとなつてしまいました。ただでさえ物資が不自由になっていた江戸を復興させるためには、まず、米を安全に安価に江戸まで運ばなければならぬという必要に迫られたのであります。

幕府は、当時経世家として高名だった河村瑞賢に命じて、まず奥州の方の米を江戸へ運ばせることにしたのであります。

河村瑞賢はいろいろ計画を立てまして、まず途中の地理を調べて暗礁が多いところを避けるようにする。あるいは途中に立務所(番所)を置いて米を積んだ船は職を立てることになっているので、この沖を米を積んだ船が通ったら飛脚を走らせて次の番所へ知らせる。

知らせを受けた方では、沖の方をよく見ていて、もう通らなければならぬ頃だのに通らないということになれば途中で何か故障があったものとして調べる、などといういろいろな計画を立て寛文十(1725)年に米を積出すことになったのであります。

しかしそういうふうな計画を立てる上において、熟練した船頭が何としても大事だということで、当時日本で最も秀れた船頭として尾張、伊勢、紀伊、三ヶ国の水夫を募って福島の米を積んで運ばせたのであります。この時には阿武隈川を荒浜まで下り、それからずっと予定の海路によりまして犬吠崎の沖を通り、潮流の関係で遠回り

河村瑞賢の功績は勿論のことでありましたが、その背景として、実際に船を動かしたのは船頭達であります。その船頭達は六ヶ所から出て参ったのですが、その中で最も秀れておったのが塩飽の船頭達だったのであります。新井白石は「奥羽海運記」という書物の中で、このことを褒めたたえて、

『塩飽の船隻特に完璧精巧、佗州(河村)視るべきに非ず。』

つまり、塩飽の船が丈夫で秀れておることは、日本中、他に見ることができない。

『其賀使郷民亦淳朴譎らず。宜しく、特に多くとるべし。』

塩飽の船頭は真面目で正直で、よく働くから他の船頭よりは特に多く用いよ、と言っておられます。

なお、その後にもって、

『尾勢等の船隻の如きは、即ち雑雇もって、数を足すを取りて可なり。』

尾張、伊勢等の船が二年前に奥州の米を運んだときのことをいって、尾勢の徒の如きは雑の雇人として、人数が足りない時に、その補充として使うだけで十分なのである、と言いつつおられます。

すなわち、新井白石は、六ヶ所の船頭が出てきたものの、その中で塩飽の船頭は日本全国で比べものがないほど秀れているし真面目でよく働くから特に多く用いよ。塩飽の船頭に比べ、かつて日本一といわれた尾張や伊勢

の船頭などは雑雇で、船頭としての価値はない、塩飽の

船頭こそ日本一だと折紙を付けておるのであります。

この後塩飽の船頭が主として、出羽地方の米を大坂や江戸へ運ぶ仕事を一手に引き受けるようになりました。

この頃に東廻りの航路と西廻りの航路ができたということは、江戸時代の日本の海運界において最も大きな出来事でありました。

この西廻り航路を、北前航路、北廻(北廻)航路、船を北廻い船といいました。主に米を積みましたから塩飽島内では米のことを「キタマイ」といい、「もうキタマイを出してもよかるう」などという、言葉がいまでも残っております。

このように、日本の海運界の殆どを塩飽の船頭仲間が握るといふことになりました。どこの港へ行っても塩飽の船を見ないことはないというほどになったのであります。

その中で最も著しいのが本島の南にある牛島であり、この島は小さい島なのでありますが、そこから沢山の船乗りたちが出ました。

延宝七(1729)年に牛島の南側、つまり丸亀へ向いてお

#### (四) 海の豪族丸尾五左衛門

その中で最も有名なものが、皆様御承知の丸尾五左衛門であります。

内海の海上王といっているくらい船持ちであります。丸尾五左衛門の先祖は肥前の浪人だったともいい、

全盛時代は、寛永の末(1643年)頃から、およそ百年くらいであります。なかでも二代目重次から四代目正次の頃迄の五十余年間が丸尾家としては最隆盛の時代でありました。

どのくらい盛んであったかといふことはいろいろの話もありますし、こんな伝説や作り話もあります。

沢山の船があつて、全部の名前を一々覚えきれないで、イロハ四十八文字でイロハ……エヒモセスまで、みんな使ってしまった後につける文字がなくなり、無じりるしの船があつたといわれておりますが、これは船がいかに沢山あつたかといふことのとえでありましょう。

しかし、実際は一万一千二百石で、十三艘の船があつたことは確かで、小さいのは三百二十石、大きいのは千五十石くらいまでの船を持っておりました。

それで北は北海道から奥羽、南は九州あたりの諸大名の御用を勤め、あるいは大坂、江戸へ諸国の物産などを輸送したり、また、交易などもやっておりました。

丸尾五左衛門「屋号を「丸屋」といひまして、丸にやの字を書いて船のしるしにしておりました。

この丸屋の船が沢山の荷を積んで江戸へ行く途中に紀州沖を通ります。紀州の蜜柑を採っている人が、丸尾五左衛門の船が毎日々々通るのが見えるものだから、

沖を走るは丸屋の船か

丸にやの字の帆が見える

と、唄ったといふことあります。

このことをみましても、いかに丸屋の船が頻りに紀伊

の浦に船着き場や堤防などをこしらえました。その時に船頭達が自分の持船の石高に依じてお金を出し合ったのであります。その頃の記録をみますと五十二人の名前が書きならべられております。

そして船の石高が全部で四万八千七百五十石、これは五十二人の合計の石高で、これを一人平均したら九百四十石になります。牛島の五十二人は殆ど千石の船持ちだったと言えるのであります。

これによりまして牛島がどれほど船主として栄えたかということがわかります。

この牛島に長徳院という寺がありますが、そこに板に書いた寄付の名札があります。それには四十一名の名前が書き並べられておるので船頭が四十一人いたわけなのでしょう。

前の五十二人に比べると少なくなつてはおりますが、しかし現在でも六十戸くらいの牛島でもって、四十一人の名前が出ていたのであります。島全体が大きな船主だったということが言えるのであります。

あるいは肥後の豪商であつたとも、いろいろ申しておりますけれども、最初は平尾という姓を名乗っておりましたが、牛島へ来てから丸尾と改め、代々五左衛門と名乗つたのであります。

水道を上下しておつたかといふことを知ることができるのであります。

一方、丸尾五左衛門一族は非常な信仰家でありまして、神社や仏閣に対する寄進を沢山やっております。菩提寺である牛島の長徳院の御堂、塔、一切経などは丸尾五左衛門の寄進になっております。

本島の正覚院や徳玉神社にも丸尾五左衛門の寄進になつておるものがあります。仲多度郡四箇村の、春日神社やその外にも丸尾五左衛門の寄進になつたものといわれておるものがあります。

なお、丸亀の寿覚院に丸尾五左衛門が建てたお墓があります。高さが一間以上もあり、一説では五左衛門の妾の墓だと言われておりますが、死んでも忘れることができないといふので、牛島の方を向いて建てられたといひますが、実際は牛島の方角ではなくて東を向いて立っております。他にも諸説があつて、誰の墓か、はっきりしません。丸亀の堺屋源右衛門に嫁いだ娘の墓ではないかとも言われております。

また先だつて行って見せて貰つたんですが、飯野の横田周一さん方には、丸尾五左衛門家から嫁入りした娘が持ってきたといふ、丸尾家の金蒔絵の定紋入りの硯箱、小箱、衣桁などが伝わっております。

豊原の山道家にも、丸尾五左衛門の娘がお嫁に来たとき、おひなさんを入れるためにわざわざ造つたといわれている雛倉がいまも残っております。また善通寺のお寺に昔から七十万円の花瓶といふのが



伝えられております。高さが二尺四、五寸もある大きな青磁のきぬた形の牡丹の模様の入った立派な花瓶であります。ただ、七十万円の花瓶とだけ言い伝えられていたものです。

ところが、博物館の入田整三さんが古文書を調べてみると、七十万円の花瓶の寄進書が出てきました。これを見ますと、寄進したのは丸尾五左衛門で、丸亀の殿さんの家来で百十石を貰っていた戸祭新四郎が取次いで寄付したものであります。これによって七十万円の花瓶のいわれが、はっきりしたというわけであります。

これは宋時代の逸品であります。これから見て支那あたりとの密貿易をやっておったものではなからうかと考えられるのであります。

なお丸尾五左衛門のうちに大名の借用証文が残っております。

借主は肥後の熊本殿様、細川侯であります。宝永三(1706)年から享保五(1720)年までの間の四枚の借用証文があります。

この四枚の借用証文の金額を合わせてみますと、銀二百二十三貫九百九十六匁でこれだけの金を熊本の細川侯へ貸しております。

銀で二百二十三貫九百九十六匁といっても一寸わかりませんが、これを金に直してみますと、金と銀との相場は、時代によって違いますけれども、この時代では金一両は銀六十匁に当たっております。

ですから、これを六十で割ってみますと大体三千七百

て、こういうわれております。

この鐘は昔から誰も鳴らした者がいない。若し、鳴らす者があつたならば、その人は間もなく百万長者になつて栄耀栄華を極めることができるが、しかしその人は間もなく没落し、無間地獄におちて地獄の苦しみを受けねばならないということから、誰も百万長者になりたと思いませんけれども、やがて没落して無間地獄の苦しみを受けねばならないことを恐れて、鳴らした者はいないし、音を聞いたこともないので、無音の鐘だと言われていたのであります。

この時分に一介の青年漁師だつた丸尾五左衛門が「俺も男と生まれていつまでもこんな貧乏漁師をしておつてはつまらん。一日でも、一晩でもかまわんから百万長者になつて栄耀栄華を極めたいものだ。それには誰もついでたことのない無間の鐘をついてみよう」ということで、ある夜ひそかに自分の家を出まして、お寺の石だたみを踏みながら、鐘楼の蜘蛛の巣を払いのけて、上から不気味に蛇がたれ下っているような綱を引いて、力まかせに無間の鐘をつきました。ゴーン、ゴーンというおそろしい音が、人々の真夜中の夢を破りました。

島中の人は「無間の鐘が鳴った。何か恐ろしいことがありはしないのだろうか」と、驚き怪しみ、恐れながら一夜を明かしたが、別に変つたことは起らない。

二、三日たつても変わつたこともないので、やがて誰が鐘を鳴らしたかという話は、話題から遠のき、それも忘れられてしまいました。

三十三両に当たります。これを米に換算しますと、米の相場も時代によって違つておりますが、大体米一石がおよそ一両ということになります。

結局、三千七百三十三石の米に相当する金を貸しており、これを今の時代の価に換算しますと一石は安く見積もつても一万円でありますから、三千七百三十三万円という大きな額になります。

肥後の殿様もなかなか悪かつたようで、三井家の記録には、「わけて細川家は前々よりふらちなお家柄にて、度々町の借金断りこれあり……云々。」と書かれております。

このように細川の殿さんは、借金を踏み倒すことを何とも考えていないから、文政五(1822)年に催促をしてい

るんですが、返さん。これほど沢山の金を借りた熊本の殿さんは五十四万石、鹿児島殿さんに次いで九州で二番目の大きな殿さんであります。それに金を貸しておつたのでありますから、丸尾五左衛門がいかに富豪であつたかということを知ることができるのであります。

それほどに栄えた丸尾五左衛門家も、全盛時代は百年くらいの間もなく次第に衰えました。急に没落したのであります。

丸尾五左衛門の伝説として「無間の鐘」という話があり、ちょっと余談になりますが、これは有名な話でありますから、申し上げておきます。

牛島のお寺に、昔から不思議な鐘の話が伝わってお

一方、五左衛門は翌日から漁に出かけると、いつも必ず大漁が続きます。船一杯魚をとつて、それを売ってはお金がいくらでも入るので、いっそ漁師より船乗りになろうということ、船を買い荷物を運ぶ。他の船は時化にあつたり、難破したりしたけれども五左衛門の船は、いつも順風ばかりだつた。

そして船は一そうが二そうになり、三そう五そうになつて、遂にはイロハ四十八文字以上の、沢山な船持ちになることができたのであります。

五左衛門の船はそれぞれ日本中の港に行つてゐるために、自分の船全体を見たことがないのであります。牛島へ戻つてきておる船もあれば、どこかの港へ行つておる船もある。

そこで、いつか沢山ある自分の船を一ヶ所に集めて、眺めてみたいものだということ、ある年の暮れに全国の港々へ使いを出して、今年の十二月の末にみんな牛島へ帰つてこい、みんな揃つて新しい年を迎えたいからというので、全国の港々に出でいた船がみんな牛島へ集まつて来て、丸にやの字を描いた帆を張つた船が牛島の沖全体に並んだのを、五左衛門は山の上から眺めて、すこぶる満足して、翌日、船全体の酒盛りをして、飲めや歌えの大騒ぎをしました。

その最中に疊二帖も敷いたくらいの灰色の大きな蝶々がフワリフワリと飛んでいった。それを見た島の人は驚いて不吉なことがありはせぬかとおびえているが、船頭たちはだれもそのことを知らない。

ところが、その真夜中に大きな音がすると同時に牛島の東の「牛が首」という所にあった大きな岩が地響きと一緒に海に落ち込み、大風、大津波となって五左衛門の船は一艘も残らず沈んでしまいました。

無間の鐘の予言通りに一朝にして元の貧乏になってしまったと言うのであります。

これが、無間の鐘にまつわる話であります。これは多分、坊さんが作った話ではなからうかと思えます。

「無間の鐘」といわれるこの鐘に浄巖和尚の銘が刻まれています。

浄巖和尚という方は、將軍綱吉の非常な知遇を得て、江戸の湯島に観音堂を建てたり総本山靈雲寺の開基和尚

になったような偉い坊さんであります。その坊さんが牛島へ来ているのであります。

これは丸尾五左衛門などの船持ちの招きによって来島したのであります。その浄巖和尚の銘のあるのがこの鐘であります。

この釣鐘に関係づけて、「無間の鐘」という伝説が作られたのではないかと思ふのであります。

塩飽の船頭として丸尾五左衛門が代表的ですが、長喜屋伝助その他多くの優秀な船頭が出て、まあ江戸時代の日本の海運というのは、塩飽の者でほとんど占めておったといってもよいのであります。

#### (五) 幕末・明治黎明期における塩飽船方の貢献

時は移り、幕末の頃となりまして、諸外国との交流がおこり貿易を始めるようになってまいりますと、貿易と

海軍とは相並ぶ一並行していなければならぬという思想が起こります。そこで外国との貿易をする以上は、どうしても日本の海軍を創設しなければならぬ、という機運が高まりはじめました。

しかも、それまでのようなものではなく西洋流の海軍でなければならぬというので、洋式の軍艦を作る、或いは、海軍をつくるということになりました。

この頃、日本の先覚者であった水戸の徳川斉昭は、新しい軍艦を作ること提唱しましたので、幕府は安政六

(1859)年に、浦賀で鳳凰丸という船を江川太郎左衛門に作らせた。西洋型の軍艦としては初めてであります。

さて新しい軍艦は出来たが、その軍艦を操縦する水夫が当時いなかったためです。日本で初めて作った西洋式の軍艦、しかしこれを動かすにはどうしても水夫がいるというので、秀れた水夫四十三人を集めたのであります。その四十三人というのは伊豆の下田から十三人、

残りの三十人が塩飽から出ております。

浦賀で作って、浦賀の沖で試運転するので、浦賀に近い下田から十三人の水夫が出ることは不思議でありませぬけれども、この遠い塩飽から三十人も水夫が出たこ

とは、新しい軍艦を操縦する技術では塩飽が最も秀れていたということであります。

次いで咸臨丸が万延元(1860)年にアメリカへ初めて参りました。アメリカと和親条約が結ばれて、その批准書を交換しなければならぬ。そこで新見豊前守が正使となつて、これはアメリカのボーハタン号という軍艦に乗って行ったのであります。別に日本からも軍艦をアメリカへ派遣することになりました。海軍では練習とともに、日本の海軍の威力を示そうと非常な意気込みでありました。

小さいながら咸臨丸を選ぶことになったのであります。万延元年に出帆することになりました。幕府の役人、水夫、火夫等、全員で九十六人が乗り組みました。

別にアメリカの測量船ベネモハクワ号が日本で難破して、本国へ帰れなくなっていた。ブルック船長以下十一人が「乗せて行ってくれ、つれて帰ってくれ」というので、日本人九十六人の外にアメリカ人十一人が乗って参りましたが、乗る時分に、航海中は一切アメリカ人が指図してはならないぞ、という条件付で乗せて行つたのであります。

軍艦奉行木村撰津守が大将となり、勝安房これが艦長という格で乗っていた。水夫が五十人、その五十人の水夫のうち、塩飽が三十五人、長崎が十五人です。つまり五十人の水夫中で七割までがこの塩飽から出ておる。しかも咸臨丸がアメリカへ行くことは、日本の開闢以来の壮挙でありました。

これより先、支倉常長が慶長十八(1613)年、太平洋を渡ってメキシコへ行き、それからローマへ行ったことがあります。

それから、九州の諸大名の使節がローマへ行ったことがありますが、これらは外国の船に乗せて貰って行ったものであります。

日本人が船を操縦して太平洋を横断して行ったのはこの咸臨丸が最初であります。万延元年正月十三日に品川を出まして、二月二十六日にサンフランシスコへ着いております。

行きがけは非常な難航で船が大分傷んだので、メリーアイランドで船の修繕等をしたのであります。そして、閏の五月に日本へ帰ってきたのであります。帰りにはハワイへ寄って、ホノルルで国王にも会って帰ってきました。

その中で気の毒なのは塩飽から出ていった二人の水夫があちらで病死いたしましたこと。その墓は今でもサンフランシスコ郊外の、日本人の共同墓地に残っております。

ついで文久二(1862)年に海軍留学生を初めてオランダへ送ったことがあるが、その時十五人が選ばれました。

榎本武揚、内田常次郎などが一番よく知られているのであります。その中に医者二人入っております。

その十五人の留学生の中には、塩飽から古川庄八と、山下岩吉の二人も入っております。日本で初めて海軍の留学生を送った十五人の中に二人

まで塩飽から選ばれているのを見ても、その当時の日本の海軍の中で、塩飽がどれほど重きをなしていたかということが知れるのであります。

行きは九月の十一日、長崎を出帆いたしました。翌年の四月の十八日にオランダへ着き二一五日かかっております。今から考えればおかしいようですが、その頃は、スエズ運河は開けていない。

長崎を出まして南へ行ってジャワ島で船を乗りかえまして、それからインド洋を南へ進み、アフリカの希望峰を回って大西洋に出て、セントヘレナ島へ寄ってナポリオンの遺跡を訪ねてオランダへ行ったのであります。

オランダでは勉強をして、帰りに丁度日本がアメリカへ注文しておいた軍艦が出来上りましたのでその開陽丸という新造船に乗ってこれを操縦しつつ帰国しました。帰りの航路はオランダを出て大西洋を西にずっと南アメリカへ回り、太平洋へ出て帰ってきたのであります。

慶応二(1886)年十月にオランダを出て、翌年の慶応三年三月十二日に横浜に着いております。

この海軍の留学生として、あっちへ行っている時の赤ゲットとしての面白い話が沢山残っておりますが、それを話す時間はとてごさいません。その古川庄八の養子を古川阪二郎といつて、満鉄の理事や、鉄道院副総裁、笹子峠のトンネル(日本第四位の長さ)を設計した人で塩飽広島の青木の出身です。

その他、この時分に渡辺清次郎という人がいました。弘化四(1823)年に生まれた人ですが、年齢十四才の時に

だと申しております。

とくに、後には総理大臣なり、二・二六事件で亡くなられた斎藤 実海軍大將も渡辺清次郎から留学の時の費用等を出して貰ったりして、朝鮮総督であった時も行き帰りなどには、夫妻で渡辺清次郎の所へご挨拶に来ておったという話があります。

そして渡辺清次郎は昭和十三年に九十二才で亡くなりました。非常に長命でしたが、八十八の米寿のお祝いのおときには、当時生き残っておった海軍の将官達が寄って謝恩会を開いたという非常に奥ゆかしい話も残っております。

この渡辺清次郎の息子さんが渡辺真吾で、日清戦争のとき黄海の戦いで勇名を轟かせた海軍大佐であります。日清戦争の時の海軍大佐というのは、後には原田中将など立派な人が出ましたけれども、その当時の大佐というのは香川県では他に一人もいなかったのであります。

文久元(1862)年から二年後に小笠原島を開拓することになりました。小笠原島があつた時でも日本の領土であることは間違いないのであります。アメリカ人が沢山やって来たので、あれを自分の領土にしようという動きがあつたので、日本から移民をして開拓しなければならなくなつたのであります。その日本から移民を送ります

ときの船は殆ど塩飽の水夫が乗り組んで操船しました。咸臨丸がアメリカから戻っていたので、小笠原への行き帰りに当たりました。咸臨丸に塩飽の水夫四十二人が乗っております。その他、朝陽丸という軍艦に四十九人、

幕府の軍艦の幡竜艦に乗っていましたが、明治維新の鳥羽伏見の戦いの際に幕府の軍艦に乗り組んで、丁度大坂へ行っておつたんであります。鳥羽伏見で敗れた十五代将軍徳川慶喜が大坂へ逃げてきました。

その時、渡辺清次郎は開陽丸に乗っていたのですが、丁度榎本武揚は陸戦隊を連れて上陸しておつた留守に、アメリカの軍艦から「非常に身分の高い人が来ているから迎えにこい」という使いが来て、副長の沢太郎左衛門がボートを出し、渡辺清次郎が梶をとりながらアメリカの軍艦へ着けまして、この高貴なお方というのを乗せて帰ってきたのですが、その方が十五代将軍の慶喜公だったのであります。

すぐに開陽丸を出帆させよというので、榎本武揚等を置き去りにして、江戸へ向けて航海しました。そのときも、渡辺清次郎が操舵の大事な役目を勤めたことから、後で非常にほめられました。

この人は明治四年に、後の海軍兵学校の前身の兵学寮が建てられた時分にその教官になったのであります。

そして船を操縦する運用術を教えました。それから、明治十四年まで十一年間勤めていました。その中から後の海軍の将官達が沢山出ました。

山本権兵衛海軍大將、日本海々戦の英雄東郷大將の参謀で戦術家として勇名を轟かせた加藤定吉、その他明治から大正へかけての海軍の大將、中将の主な人は殆ど兵学寮で渡辺清次郎の教えを受けたのであります。それでいつも私は、渡辺清次郎は日本の新しい海軍の生みの親

せんしゅう丸という軍艦には三十六人の水夫達が乗って

小笠原島への移民を送つたのであります。このように、幕末において洋式の軍艦なり、或いは汽船の航行には、殆ど塩飽の船方がずっとこれに当たっておりました。

そして、それ以後におきましても日本の新しい汽船の船長、その時代には頼朝丸とか、謙信丸とか、義経丸とかいう風に、昔の武將の名前をつけているのが多いのであります。その船長、操舵手には塩飽の人々が沢山出ていっております。

以上述べましたように、大体江戸時代におきまして、日本の海運界に塩飽の船方が占めていた地位は非常に大きなものがあり、後に新しい日本の海軍を創設する上におきましても、また日本で初めて出来た軍艦である鳳凰丸の乗組員として塩飽から三十人も出してあります。

しかも、日本最初の太平洋横断の水夫の半ば以上が、塩飽の人々でありました。日本海軍の創設期に、兵学寮の教官として渡辺清次郎を出したということや、塩飽の船方がこの当時いなかったならば、明治から大正にかけての強力な日本の海軍の発展ということは、或いは多少遅れたんではないかということが考えられるのであります。

丁度九時になりました。予定の時間が参りました。甚だつまらない話を申し上げて解りにくかったらと思

いますが、私にあてがわれていた、丸亀港の発達と塩飽の船方の活動について、以上簡単に申し上げます。

甚だお聞き苦しかったことと存じますが、御静聴を賜り厚くお礼申し上げます。

(完)

◎ 講師と受講者の質疑応答(要点)

「問」 現在の新堀の入口にある水上署は、昔は何だったのですか。

「答」 あれは江戸時代の船番所でした。

「問」 人名は大政奉還の時になくなったのですか。

「答」 そうです。大政奉還の時になくなったのです。人名は土地を有しておったから、大名と同様に華族にしてほしい、ということを陳情しましたものの、許可が下りなかったようです。人名の私有財産はいまも残っており、僅かながら配当が出ているようです。

「問」 船の石数というのはどのくらいのものですか。

「答」 千石船というのは千石の米が積める船のことです。

「問」 お話の中に「海賊」という言葉がありましたが、本当に海賊をやっていたのですか。

「答」 時々やっていたようです。

「問」 牛島の船方と丸亀藩戸祭新四郎とはどんな関係があったのですか。

「答」 はっきりしたことは存じませんが、娘がこちらへ嫁に来ておるようだから、その縁故があったのではないのでしょうか。

(以上)